

【原著論文】

宮沢賢治の方言表記 —— 「鹿踊りのはじまり」を中心に——

Dialect of Miyazawa Kenji:

Focusing on the Shishiodori no Hajimari

山口豊\*

YAMAGUCHI, Yutaka\*

要旨

宮沢賢治の作品には詩・童話ともに岩手・花巻の方言が用いられているものが多いことはよく知られている。本稿はその中でも童話「鹿踊りのはじまり」の作中に用いられた方言をどのように賢治が表現しようとしていたのかということに焦点を当て、その表記を分類することにより、方言を写し出すために文字による表記としてどのように工夫しているかを考察することを目的とした。その結果、この作品の中では7つの方言表記の工夫が見られることを報告するものである。

はじめに

宮沢賢治は明治29年(1896)に東北地方にある町、花巻で質・古着商を営む父政次郎、母イチとの間に生まれた。盛岡中学に入学するまでは花巻の町で暮らし、その後大正10年(1921)に信仰上の理由から東京に住み始めるもすぐに戻ることになり、花巻農学校に勤務する。この間多くの童話などを創作したが、その中には賢治の生活語であった花巻のことばがいくつも見られる。

賢治作品の多くは標準語で書かれている。もちろん標準語と言っても完璧なものではなく、方言語法の入り混じった共通語的なものであったらしいことがいくつかの先行研究で立証されている<sup>(1)</sup>。

賢治にとって標準語とはどういうものだったのか、また方言とはどのようなものであったのかということについては別の機会に論じるとして、本稿は賢治がどのように方言を作品に記載しようとしていたのか、その実態を明らかにすることを目的とするものである。

文献に現れた方言

日本語がいつごろどのようにして成立したのかということについては未だに明らかになっていないが、日本人が「漢字」という記述方法を手にした頃にはすでに方言があったことが万葉集に見られることからわかる。

巻十四には「東歌」として、上総国、下総国、常陸国、信濃国、遠江国、駿河国、伊豆国、相模国、武蔵国、陸奥国の歌が収められている。

- 3351 つくばねに ゆきかもふらる いなをかも  
筑波祢尔 由伎可母布良留 伊奈乎可母  
かなしきころが にぬほさるかも  
可奈思吉兒呂我 尔怒保佐流可母 (常陸国)
- 3437 みちのくの あだたらまゆみ はじきおきて  
美知乃久能 安太多良末由美 波自伎於伎弓  
せらしめきなば つらはかめか  
西良思馬伎那婆 都良波可馬可 (陸奥国)

また、巻二〇には防人の歌が多く収録されていることも有名である。

これらは東国の人々を徴兵したのであるから、東国のことばが記載されている。このときの方言は漢字表記で表され、中央語との語形や語法の違いが表されていた。

時代は中世に下るが、宣教師たちが布教のため日本を訪れた際に、日本語学習のためにローマ字で記した日本語の資料群がある。いわゆるキリシタン資料と言われるものであるが、この中の一つに『日葡辞書』がある。この辞書には九州の肥後方言がいくつか見られるという<sup>(2)</sup>。ここに記された方言はローマ字表記であるため音が比較的わかりやすいという特徴がある。

さらには江戸時代になると、方言意識が強くなり、江戸語が中央語としての性格を持つようになっていく。地方の人々は各地の方言を江戸と対比させて捉えており、『俚言集覧』『仙臺言葉以呂波寄』『かたこと』『御国通辞』『菊池俗言考』『新撰大坂詞大全』など、多くの資料が残されている。

江戸においても文化6年に書かれた式亭三馬の『浮世風呂』には次のような記載がある。これは『新日本古典文学大系』86(岩波書店 1989)から抜き出したものである。なお、注意したい標記の部分を山口が強調した。

\* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

- ① 常のにごりうちたる外に白濁しろきにごりをうちたるはいな  
かのなまり詞にて おまへがわしがなどいふべきを  
おまへが<sup>か</sup>わしが<sup>か</sup>といへるが<sup>か</sup>ぎ<sup>き</sup>く<sup>く</sup>げ<sup>げ</sup>ご<sup>ご</sup>の濁音とし  
り給へ (8頁)
- ② 三助「モノ金かねを拵こせへべい云て山事てつ やまごと わりは悪い事こんだネ わ  
しい国くにサ居たとき珍事あてうような事ちんじが<sup>か</sup>有あつけエ。爰こで  
エ、何云あんちうが<sup>か</sup>な。己方うらアほうで薯蕷やまのよもと云ます  
みなみな「江戸やまでも山いもの芋ささ  
三助「モノ、夫すんで其その、薯蕷やまのよもめが<sup>か</sup>、鰻うなぎいなつたアだ  
みなみな「ハテナ  
三助「もつともハア、五躰ごてへそろ揃つてもねへ。半分ふはんぶんが<sup>か</sup>  
薯蕷やまのよもで 半分ふはんぶんが<sup>か</sup>鰻うなぎつこ子れうしだア。そこでハア獵師やまのかみイ、  
夫それエ見てうつたまけ<sup>か</sup>ただア。何でも山あ神やまのかみどの、崇たり  
かうかばみ蟬うかがみ蛇ばけだつぺい。蟬蛇ところの化ませうねへ所もんか魔性ちげへの物に違  
ねへ。打殺おつころさア手てもねエ事こんだが<sup>か</sup>、臨終りんじうしねへときや  
アきびわり気味あ悪いと、何かハア、村内むらねへう打つち寄よつて評ひやう定てうのした  
所とこが<sup>か</sup>、モノ、曾根そね村むらの松まつ之の丞せう殿どんちふ人は、神功じんぐう皇后こうぐう  
さまの時分じぶんから代々でへでへつどい続つた博識ものしりだア。(30頁)

これらは方言を平仮名や片仮名、記号を用いて書き表  
そうと工夫されている。他にも十返舎一九の『東海道中  
膝栗毛』や『三河物語』など、文学作品などにも方言が登場する作品は多くある。

### 宮沢賢治の作品に登場する方言

江戸時代、南部藩士の服部武喬が寛政 2 (1790) 年に  
『御国通辞』を著し、南部藩のことばと江戸のことばの  
語彙比較を行っており、岩手方言を漢字とひらがなで対  
応させている。(3)

このように方言を文字表記しようとする試みは古くか  
らおこなわれており、賢治もまたその一人であった。

賢治は多くの童話や詩を残しているが、方言が登場す  
る作品も決して少なくはない。

賢治が日常生活で用いていた方言は出生地から見て岩  
手方言であると考えられる。そこでまず岩手方言の特徴  
について確認しておく。岩手方言には次のような特徴が  
あるとされている(4)。

- ・サ行、タ行、ザ行のイ段音はウ段音に統合する。
- ・「イ」と「エ」は「エ」の音に統合する。

- ・連母音「アイ・アエ」は「エー」ではなく、「エアー」  
が対応する。
  - ・連母音「アウ・エウ」は融合しない。
  - ・連母音「イエ」は「エー」が対応する。
  - ・連母音「ウイ・ウエ」は後接の子音によって「エー」「ウ  
ー」「ウエ」が対応する。
  - ・連母音「オイ」は「エー」「オエ」が対応する。
  - ・一語中の第二音節以下にある/k//t//c/は有声化する
  - ・一語中の第二音節以下にある/g//z//d//b/は鼻音化する。
  - ・母音「ア」に挟まれたワ行子音は脱落する。
  - ・「ツァ」「ツォ」の拍が存在する。
  - ・撥音が語頭に位置しうる。
  - ・「来る」の未然形には「クラ(セル)」「キラ(セル)」「コ  
ラ(セル)」等の形が存在する。
  - ・「する」はサ変ではなく、四段化している。
  - ・形容詞、形容動詞の末尾の連母音「アイ・オイ」を含む  
場合は融合する。
  - ・形容動詞の連体形は終止形と同じ「ダ」となる。
  - ・限定を表すときは「ンバカリ」を用いる。
  - ・丁寧さを表すときは「アンス(ヤンス)」を用いる。
  - ・女性が用いる丁寧表現として「ガンズ」がある。
  - ・ラ行動詞の場合、下に語が続く場合の終止形、連体形の  
活用語尾「る」は撥音または促音になることが多い。
  - ・過去表現として「タッタ」がある。
  - ・接続助詞「ハンテ」が見られる。
  - ・目的格の助詞「ニ」が「サ」となる。
- などといった特徴がある。

方言が使用された作品については高野路子(1987)や  
小島聡子(2013)の調査報告がある(5)。

本稿では独自の調査により、童話に絞って次のような  
作品に東北方言が使用されていると認定した。

「種山ヶ原」「とつこべとら子」「十月の末」「ひかりの素  
足」「風野又三郎」「革トランク」「葡萄水」「みじかい木ペ  
ん」「台川」「イギリス海岸」「タネリはたしかにいちにち  
噛んでみたやうだった」「虔十公園林」「祭の晩」「なめと  
こ山の熊」「風の又三郎」「狼森と笹森、盗森」「鹿踊りのは  
じまり」「山地の稜」「泉ある家」「十六日」の 20 作品  
である。具体的に賢治が記した方言を見てみよう。

今回は「鹿踊りのはじまり」に出てくる方言を中心に  
考察することとする。この作品は次のような方言の会話  
が登場する。なお、出典は、筑摩書房『新校本宮沢賢治全  
集』第 12 巻本文篇(1995)による。

- ① 「こいづば鹿さ呉でやべか。それ、鹿、来て喰」
- ② 「はあ、鹿等あ、すぐに来たもな。」
- ③ 「ちや、おれ行って見て来べが。」
- ④ 「うんにや、危ないじや。も少し見でべ。」
- ⑤ 「何時だかの狐みだいに口発破などさ罹ってあ、つ  
まらないもな、高で柄の団子などでよ。」
- ⑥ 「そだそだ、全ぐだ。」
- ⑦ 「生きものだがも知れないじやい。」
- ⑧ 「うん。生きものらしどごもあるな。」
- ⑨ 「なちよだた。なにだた、あの白い長いやづあ。」
- ⑩ 「縦に皺の寄つたもんだけあな。」
- ⑪ 「そだら生きものだないがべ、やつぱり蕈などだべ  
が。毒蕈だべ。」
- ⑫ 「うんにや。きのごだない。やつぱり生きものらし。」
- ⑬ 「さうが。生きもので皺うんと寄つてらば、年寄りだな。」
- ⑭ 「こんどおれ行って見べが。」
- ⑮ 「喰つつがないが。」
- ⑯ 「うんにや、大丈夫だ。」
- ⑰ 「なちよだた、なして逃げで来た。」
- ⑱ 「喰じるべとしたやうだたもさ。」
- ⑲ 「ぜんたいなにだけあ。」
- ⑳ 「わがらないな。とにかく白どそれがら青ど、両方  
のぶちだ。」
- ㉑ 「匂あなちよだ、匂あ。」
- ㉒ 「柳の葉みだいな匂だな。」
- ㉓ 「はでな、息吐でるが、息。」
- ㉔ 「さあ、そでば、気付けないがた。」
- ㉕ 「こんどあ、おれあ行って見べが。」
- ㉖ 「何して遁げできた」
- ㉗ 「気味悪ぐなでよ」
- ㉘ 「息吐でるか」
- ㉙ 「さあ、息の音あ為ないがけあな。口も無いやうだ  
けあな。」
- ㉚ 「あだまあるが。」
- ㉛ 「あだまもゆぐわからないがつたな。」
- ㉜ 「そだらこんどおれ行って見べが。」
- ㉝ 「おう、柔つけもんだぞ。」
- ㉞ 「泥のやうにが。」
- ㉟ 「うんにや。」
- ㊱ 「草のやうにが。」
- ㊲ 「うんにや。」
- ㊳ 「ご（ま）ざいの毛のやうにが。」
- ㊴ 「うん、あれよりあ、も少し硬ぱしな。」
- ㊵ 「なにだべ。」
- ㊶ 「とにかく生きもんだ。」
- ㊷ 「やつ（ば）りさうだが。」
- ㊸ 「うん、汗臭いも。」
- ㊹ 「おれも一遍行つてみべが。」
- ㊺ 「ちや、ちや、嘔じらへだが、痛ぐしたが。」
- ㊻ 「舌抜がれだが。」
- ㊼ 「なにした、なにした。なにした。ちや。」
- ㊽ 「ふう、あゝ舌縮まつてしまつたたよ。」
- ㊾ 「なちよな味だた。」
- ㊿ 「味無いがたな。」
- ㊽㉑ 「生きもんだべが。」
- ㊽㉒ 「なちよだが判らない。こんどあ汝あ行つてみる。」
- ㊽㉓ 「おう、うまい、うまい、そいづさい取つてしめば、  
あどは何つても怖つかなくない。」
- ㊽㉔ 「きつともて、こいづあ大きな蝸牛の早からびだの  
だな。」
- ㊽㉕ 「さあ、い（ゝ）が、おれ歌、うだ（う）はんてみん  
な廻れ。」
- ㊽㉖ 「のはらのまん中の めっけもの  
すつこんすつこの 柄だんご  
柄のだんごは 結構だが  
となりにいからだ ふんなかす  
青じろ番兵は 気にかがる。  
青じろ番兵は ふんにやふにや  
吠えるもさないば 泣ぐもさない  
瘠せで長くて ぶちぶちで  
どごが口だが あだまだが  
ひでりあがりの なめぐちら。」
- ㊽㉗ 「おう、こんだ団子お食ばかりだちよ。」
- ㊽㉘ 「おう、煮だ団子だちよ。」
- ㊽㉙ 「おう、まん円けちよ。」
- ㊽㉚ 「おう、はんぐはぐ。」
- ㊽㉛ 「おう、すつこんすつこ。」
- ㊽㉜ 「おう、けつこ。」
- ㊽㉝ 「はんの木の  
みどりみぢんの葉の向さ  
ぢやらんぢやららんの  
お日さん懸がる。」
- ㊽㉞ 「お日さんを  
せながさしよへば、はんの木も

くだけで光る

鉄のかんがみ。」

- ⑥ 「お日さんは  
はんの木の向き、降りでも  
すすぎ、ぎんがぎが  
まぶしまんぶし。」

- ⑦ 「ぎんがぎがの  
すすぎの中さ立ちあがる  
はんの木のすねの  
長んがい、かげぼうし。」

- ⑧ 「ぎんがぎがの  
すすぎの底の日暮れかだ  
苔の野はらを  
蟻(こ)も行がず。」

- ⑨ 「ぎんがぎがの  
すすぎの底でそつこりと  
咲ぐうめばちの  
愛どしおえどし。」

賢治の方言表記は大きく分けて7つに分類できる。

#### A 標準語形の濁音表記

東北弁は「ズーズー弁」とも言われるように、濁音での発音が多いのが特徴であり、賢治も多く濁音を用いている。

- ①こいつ→こいづ ⑥全く→全ぐ ⑦生きもの  
→生きもの ⑧とこ→とご ⑨やつ→やづ  
⑩きのこ→きのご ⑫わからない→わがらない  
⑬かかる→かがる ⑭どこ→どご ⑮すすき→  
すすぎ ⑯咲く→咲ぐ 等多数見られる。

#### B 助詞・助動詞の濁音表記

濁音表記は自立語だけでなく、付属語にも見られる。

- ①て→で か→が ⑦かも→がも ⑤みたい  
→みだい

#### C 標準語形の省略表記

賢治は発音・音節通りに記載して方言であることを表そうとしている。

- ①やる→や ②もの→も ③かった→がた

#### D 東北方言の特殊語形の表記

平仮名で東北方言独特の語形を表現しようとしている。

- ⑱なして ⑳なぢよ ㉑蟻こ

#### E 助詞・助動詞の特殊語形

- ⑤さ ⑥はんて ①べ(べい)

#### F 撥音の挿入

平仮名で「ん」を挿入することで標準語形と差を付け

ようとしている。

- ⑥ぎんがぎが まんぶし(眩し) ⑥長んがい(長い)

ただ、これは歌の中での表記であるので、リズムをつけるための工夫であるとも考えられ、他作品の用例と合わせて検討する必要があると思われる。

G 「あ」の文字を付け加えることで音の変化を表そうとしている。

- ①等あ ⑤てあ ⑨やづあ ⑩だけあな

しかし、いかに宮沢賢治とて、文字の工夫だけでは音を再現するには限界がある。ましてや方言のように独特の撥音や温かみのある語調について再現することは極めて困難であると言わざるをえない。

右記の「鹿踊りのはじまり」も花巻方言、少なくとも東北方言話者以外の者が読むのと、賢治が育った土壌で育った者が読むのとでは、同じものを声に出して読んでも、その文意は伝わったとしても味わいまで十分に伝わったとは言えないように思われる。

言葉には大きく4つの要素がある。「音」「文字」「意味」「思い」という4つである。我々は言葉を音で聞いて頭の中で文字に変換し意味を結び付ける作業を瞬時に行っている。ただ「音」や「文字」と比べて伝わりにくいものとして「思い」がある。ただでさえ、伝わりにくいものであるのに、「音」さえ聞き取れなかったら当然そこに込められた思いは十分に伝わりにくいと考えられる。それほど方言における音(発音)というのは重要なのである。

「野口田鶴子」という女性がいる。野口氏は盛岡市の出身であり、盛岡第一高等学校の卒業生で、賢治の後輩にあたるという。声楽家である彼女が賢治の作品の朗読にとりくんでいるが、公開されている映像資料の中に「鹿踊りのはじまり」がある。

私個人の感想ではあるが、聞いてみると文字で読む以上に作品の世界が広がるような気がする。

おそらく賢治もこれに近い状態でこの作品を創作したのだろう。

ただ、前述のように文字では発音を忠実に表記するには限界がある。式亭三馬のように白濁点という新たな表記方法を編み出さなかった賢治は、せめて濁音の多用をすることで方言の発音を写し取ろうとしたのではあるまいか。

もちろん何も努力をしなかったわけではない。大野眞男・竹田晃子「宮沢賢治による方言表記の工夫と地域に根ざした国語観」という論文<sup>(6)</sup>によると、方言のアとエ

の中間のような音を表記する試みとして「a」というローマ字を語中に挟み込むことがトシ筆写稿の歌稿に見られるという。ただし、これは「宮沢賢治の独創と断ずるよりも、明治から大正期にかけての時期に岩手の教育関係者の間で、ある程度一般的に行われていた方言音表記の慣行が背景にあったと見るべきだろう。」とあるように、賢治のオリジナルではないようだ。そしてまたアルファベットが何度も語中にあるのも賢治の美意識にそぐわなかったのか、童話などには使用されていない。

現代においても方言を文字に記録するには苦心している状況である。近年の技術革新により方言調査における録音媒体はテープレコーダーから IC レコーダーへと変わったが、それを文字に記すのは難しい。

方言学の分野では、横書き、カタカナ表記で、長音は棒線、高低は上線や ↗ などの記号で表すことになっている。

コリヤー ダレ ヤ。 (この人は誰かい)

コケー アル ガノ。 (ここにあるじゃないの)

神部宏泰『日本語方言の表現法』<sup>(7)</sup>より

ただ、こうした工夫は方言学の場合は正確を期すための方策ではあるが、文学としては不向きな感も否めない。

現在、出版される文学作品は、標準語を基本としているものが大半である。賢治も例外ではない。とはいえ、賢治の用いた標準語の表現の中には、一見標準語のような方言表記、気づかない方言のようなものも使用されていることも報告されている<sup>(8)</sup>。

しかし賢治は方言と標準語とを巧みに使い分けて臨場感を出すことに成功していると言えよう。

## おわりに

方言の持つ温かみや地域性を活かして方言を効果的に取り入れた文学作品はいくつも出ている。関西弁ではあるが、谷崎潤一郎や田辺聖子らの作品にも方言は見られる。近年では茶川賞を受賞した若竹千佐子の『おらおらでひとりいぐも』が自己の内面を描く際に岩手の言葉を用いたとして話題となった。

詩の世界では昭和2年(1927)に坂本遼が播州弁詩集『たんぼぼ』を刊行し、昭和6年(1931)には高木恭造が津軽弁詩集『まるめろ』を刊行している<sup>(9)</sup>。

・理髮屋の横町バまがたらジャンボヤ ヨゴチヨ 練焼くニス カマリ 匂アしてだ 「春」

・りんごの花の下のキンカホウ 指切

彼女ア先ネ死ンでまたオンなア 「指切」

高木恭造『まるめろ』より

『注文の多い料理店』が刊行されたのが大正13年(1924)であるから、このころ、日本各地で方言を使うことがちょっとしたブームだったのかもしれないが、これについては別途詳細な調査が必要になると思われるので、ここでは断定しないこととする。

ただ、こうした方言詩も方言の表記には苦勞していたことはわかる。

交通網の発達やテレビ・ラジオ・インターネットの普及により、純粋な方言話者の存在は希少なものになりつつある今、賢治作品などの方言が効果的に使われた文学作品は、方言話者による朗読、音声資料の確保が体系的に行われなければならないと考えている。

## 注

- 1 小島聡子 「標準語と宮沢賢治」『賢治学』4 東海大学出版部 2017  
小島聡子 「「ほしいくらみもたないでも」という表現について」『近代語研究』20 武蔵野書院 2018
- 2 馬場良二 「『日葡辞書』の肥後方言」『熊本県立大学大学院研究科論集』2008
- 3 服部武喬『御国通辞』『国語学大系 10』国書刊行会 1939
- 4 平山輝男 他「岩手県のことば」『日本のことばシリーズ 3』明治書院 2001  
本堂寛「岩手県の方言」『講座方言学 4』国書刊行会 1982
- 5 高野路子 「宮沢賢治の作品における方言」『野州国文学』40 國學院大學 1987  
小島聡子 「花巻方言の資料としての宮沢賢治作品」『賢治とイーハトーブの「豊穰学」』大河書房 2013
- 6 大野眞男・竹田晃子「宮沢賢治による方言表記の工夫と地域に根ざした国語観」『賢治学』4 東海大学出版部 2017
- 7 神部宏泰『日本語方言の表現法』和泉書院 2006 150頁～151頁
- 8 小島聡子 「宮沢賢治の童話における『標準語』の語法」『近代語研究』19 武蔵野書院 2012
- 9 島田陽子『方言詩の世界』詩画工房 2003